



寺西重郎・福田慎一・奥田英信・三重野文晴
(編). 『アジアの経済発展と金融システム——
東南アジア編』東洋経済新報社, 2008, 344p.

本書は、東南アジア諸国、具体的には、インドネシア・マレーシア・フィリピン・タイ（アルファベット順）の経済発展における金融システムの役割とその変容を分析・検討したものである。1990年代後半のアジア経済危機では、これら各国の国内金融システムの脆弱性が原因のひとつにあげられた。すなわち、同システムが、大量の外国資本流入を生産的投資機会に適切に金融仲介できず、不良債権を累積させ、その結果、外国資本フローの逆転とそれによる経済危機を招いたというのである。本書は、この論点を意識しつつも、これら金融システムの役割とその変容の意味を各国の長期的な経済発展と開発戦略の文脈で再検討しようとしたものである。

狙いと特徴

本書は二つの独立した分析枠組みに依拠している。一つは、個別国の歴史的経緯とは独立に金融機能の発達という観点からみるものであり、そこでは、情報やリスクに関する最近の理論的発展を踏まえようとしている。もう一つは、個別国の金融システムを歴史的初期条件の下での市場と政府の相互作用のプロセスとして明示的にとらえようとするものであり、そこでは、各国の制度発展を国際比較の文脈でとらえようとする。

後者の分析枠組みでは、発展途上国全体との比較ということではなく、直接的には東北アジア（韓国・台湾）が参照軸となる。これは、所得水準のキャッチアップに成功しているのは発展途上国の中でも東アジア地域だけであり、同地域における金融システムの役割の解明が本書の目的だからである。本書のもととなる研究プロジェクトでは、第2次大戦後から最近時に至る長期統計に基づいて東アジアの金融発展過程をとらえること、なかでも、長期資金調達および設備投資行動との関係を明らかにする

ことが目標とされている。

他方、前者の分析枠組みは個別国の金融システムの機能評価に関わる。経済発展を支える投資活動は長期資金によって賄われなければならないが、長期資金の調達には金融取引一般に伴う情報の不完備や非対称性の問題がより尖鋭に存在し、それに対するリスク分散・審査・リスク管理などの「情報生産機能」が金融システムに求められるからである。これらの機能がどのような制度システムによって担われてきたのかを解き明かすことも本書の目的の一つである。

以上の要約からもわかるように、本書の特徴は、東南アジアの金融システムの役割を分析するに当たって、金融システムの機能を歴史的発展の文脈と切り離して評価したり、あるいは、暗黙のうちに特定時期の特定の、「典型的」金融システムとの比較によって分析することなく、制度の発展との相互依存の文脈のなかでとらえようとするところにある。

構成と内容

本書の構成は、次のようなものである。まず、序章「東南アジアの金融発展」では、東南アジアの金融発展の特徴を東北アジアとの対比で論じる。続く第I部「東南アジアの金融発展——概観」では、タイ（第1章）、インドネシア（第2章）、マレーシア（第3章）、フィリピン（第4章）における、戦後の金融システムの形成史が概観される。そして、第II部「資金調達と長期資金——推計」では、タイ、マレーシア、フィリピンにおける民間企業部門の資金調達構造がマイクロ企業データを用いた計量経済分析によって推計される。最後に、第III部「東南アジア金融基礎データベース」が収録されている。以下、各章で主張される、主要な論点をあげつつ、コメントを試みたい。

序章 まず、序章は本書の全体を俯瞰し、とくに東北アジアとの対比において東南アジアの金融システムの相違点と共通点をまとめている。両者のもっとも大きな相違点として、工業化を支える長期資金動員に必要な情報生産機能において、東北アジアでは1960-70年代に政策金融が、それに遅れて東南ア

ジアでは1980年代から外資企業が未発達な国内金融システムを代替または補完する上で主要な役割を果たしたとされる。東南アジアでは、金融発展の遅れていたインドネシア・フィリピンだけではなく、当初、相対的に金融貯蓄動員が進んでいたマレーシア・タイも国内金融システムは従来、工業化資金を仲介してこなかった。そして、東北アジアに比べて、遅れて開始された本格的工業化に際しては、グローバルな金融自由化トレンドの中で、政府介入および政策金融は縮小され、その代わりに外資系企業を通じた資金調達に情報生産機能を代替していたのではないかというのが本書の大胆かつ魅力的な仮説である。

このように工業化のための長期金融の実績と経験に乏しい東南アジアの金融システムが、1990年代の金融自由化で流入した巨額の海外の短期資本を適切なリスク評価、リスク多様化、リスク管理によって効率的に生産的用途に仲介することが出来なかったのは無理もないと言える。もっとも、東北アジア、とくに韓国についても、政策金融が民間金融システムとの相互補完関係を通じて工業化資金調達に成功したとされるものの、金融システムは海外の短期資本流入を適切に仲介できなかったのであり、東北アジア、東南アジアとも、その国内金融システムは、これまでの工業化および所得キャッチアップ過程で、1990年代の金融グローバル化に対処できるだけの十分な経営資源を蓄積していなかったという意味での脆弱性を共有していたとされる。

第I部 第1章から第4章は各国の金融発展過程をサーベイしている。各章は、序章の総括の材料となる各国の金融構造の独自の発展過程を詳述している。タイ(第1章)では、民間商業資本ビジネスグループが金融システムを形成してきており、その結果、地場金融システムは工業化のための金融仲介機能において主導的役割を果たしてこなかった。マレーシア(第3章)は政府の保護行政によって民間銀行部門や公的金融部門は量的に拡大してきた一方で、社会政策その他の制約もあって、工業化のための長期金融仲介の効率性は必ずしも高いものではなかった。マレーシア、タイに比べると、インドネシア、フィリピンの金融システムは相対的に未発展で

あるとみられるが、いずれの場合も、その発展プロセスは政治構造のガバナンスの脆弱性と密接に関わっている。インドネシア(第2章)では、企業部門では華僑資本が経済支配力をもち、他方で金融システムは政府の管理下で非効率的運営を余儀なくされ、かつ根深い利権構造の存在も相まって、金融システムの仲介機能は非効率なまま推移してきた。同様に、フィリピン(第4章)では、他の東南アジア諸国に比べて早くから外資導入や金融自由化に取り組んでいるにもかかわらず、それは国内の企業や金融システムのガバナンスの強化につながることなく、継続するマクロ経済の不安定性のせいもあって、当初の低い金融深化状況から抜け出せないままである。

第II部 後半の第5章から第7章は、1990年代のマレーシア・フィリピン・タイ各国の製造業企業の資金調達と設備投資行動を企業部門のマイクロデータを用いて計量分析している(マレーシアについては全産業)。これは、前半のマクロ経済データによる観察を、工業化の担い手である企業の資金調達行動のマイクロ経済データによって実証することが目的である。資金調達行動の計量分析は、エージェンシー・コストをキー概念とする最近の標準的な企業金融理論を踏まえたものである。

いずれの国の企業の資金調達構造についても、パネルデータまたはクロスセクションデータから得られた推計は、内部留保または利益率が高いほど債務比率は低く、逆に資産規模が大きいほど債務比率は高いという、企業金融理論と整合的かつ標準的な結果を得ている。その上で、タイ(第5章)については、外資系企業と上場企業は債務比率が有意に低いこと、さらに、これらの企業の設備投資は外資系企業が大きく、逆に金融コングロマリット系企業は小さいことを見出している。すなわち、製造業の主役である外資系企業は積極的な投資行動をとるが、資金調達面で国内金融機関への依存度が低いという先の東南アジア型金融システム仮説と矛盾のない推計結果を示している。マレーシア(第6章)についても、(少なくとも1997年のアジア危機以前の時期について)タイと同様に外資系企業の債務比率は低いことを見出している。フィリピン(第7章)につい

ての実証結果は、(危機以前の時期では)財閥系企業の債務比率は有意に低いが、外資系企業にそのような特徴は見いだせていない。

本書の構成および定型化をめぐるいくつかの論点

以上、本書は東南アジアの金融システムが工業化過程で果たした役割について説得的かつ明確な仮説を提供し、その実証に取り組んで、一定の、矛盾のない証拠を示している点で意義深い成果であることは間違いない。このことを肯定した上で、いくつかの疑問点と上記仮説の妥当性について議論してみた。

まず、本書の構成について言えば、各章あるいは対象国の順序に統一性が欠けているように思われた。第I部の歴史的解説については、タイ、インドネシア、マレーシア、フィリピンの順であるが、第II部の実証分析については、タイ、マレーシア、フィリピンの順、第III部のデータベースでは、タイ、マレーシア、フィリピン、インドネシアの順に構成されている。機械的にアルファベット順に並べるか、でなければ、国の順序に何らかの意味をもたせる工夫の余地があるのではないか。

次に、第I部の歴史的解説では、各章は各国の個別政治経済構造を軸に、開発戦略の交代と実物経済成長および金融システム発のダイナミックな関係を叙述し、かつ、そこから金融システムの役割を論じている。その内容は各章が互いに独立して、自己完結的であり、工業化のための長期資金調達と金融機関の役割という、序章で展開された定型化の切り口を共有していない。これとは対照的に、第II部の実証分析は、1990年代前半の企業データについてエージェンシーコスト仮説が成立するかどうかの実証に重きがおかれており、その意味では各章が問題意識を共有している。しかしながら、これも、対象期間・企業を選択を含めて、序章の定型化仮説とどのように関連づけるのかという視点が共有されていないという印象を受けた。

より大きな問題としては、本書が企図する分析枠組みのひとつである個別発展経路に注目するのであれば、もう一つの分析枠組みである機能的分析の切り口から東南アジア型あるいはASEAN型金融シ

ステムを定型化する作業を急ぐ必要はないのではないかという点だ。東北アジアの金融システムをここで論じる必要はないのだが、政府介入による政策金融が東北アジア型金融システムの特徴であると一括するには、その定型というべき韓国と、政府系金融システムと政府系大企業、民間金融システムと民間中小企業という、工業化と金融システムの二重構造を包摂していた台湾の違いは大きすぎるように思える。

同じことが本書が対象とする東南アジア4カ国についても言えるのではないか。相対的に先進的で本書の定型化に馴染むマレーシア・タイと、歴史的に国家・企業の両方のレベルで、より脆弱なガバナンス構造を引きずっているインドネシア・フィリピンの違いは大きく、これらを東南アジア型あるいはASEAN型と定型化するには相当な無理があると思われる。確かに、工業化に必要な長期資金仲介を実現する上で不可欠な情報生産機能の少なくとも相当部分が、韓国・台湾では政策金融を含む政府介入が担っていたのに照応して、タイ・マレーシアでは外資企業が担っていたという指摘は説得的であり、それを支持する実証結果も示されている。しかし、この仮説はインドネシア・フィリピンにもあてはまると言えるだろうか。前者はいまなお金融システムは政府介入の下にあり、後者は外資企業が工業化のエンジンになり切れていない。これが現状であるとすれば、タイ・マレーシア2国の事例をもってASEAN型ということ、ましてや、それより広く東南アジア型とよぶことにはもっと慎重であるべきだろう。実際、本書でも、後半の実証分析の部分でインドネシアはカバーされていないし、フィリピンについては前半の仮説を支持するような推計結果は示されていない。

とはいえ、本書が東南アジアの4カ国の金融システムの役割を再検討する上で、単なる歴史的叙述にとどまらず、工業化プロセスにおける金融システムの役割を、情報およびリスクに関する最近の理論の発展成果に立脚して分析を試みている点は高く評価できる。すなわち、本書は、工業化による急速なキャッチアップを実現するのに必要な情報生産機能の担い手に着目し、東南アジアの数カ国について、東北アジアの政策金融主導型とは代替的な、外資企

業主導型の金融発展パターンを同定した。情報生産機能を担う主体に着目した本書のアプローチがどこまで適格性をもつものであるかの追求は始まったばかりであり、個別経路について理論と実証の両面で分析の深化を図る余地はまだ大きいと思われる。政策金融主導型にしる、外資企業主導型にしる、それらが国内金融システム機能の発展を妨げたがゆえにアジア経済危機を招いたのであろうか。政策金融主導型金融発展では国内工業部門が自立したが、外資企業主導型ではそれが難しいように思われるが、それは各々の今後の金融発展にどのような含意を持つものだろうか。本書の著者らの今後の研究成果がこれらの論点の解明にヒントを与えてくれることを期待したい。

(高阪 章・大阪大学大学院国際公共政策研究科)

Mikael Gravers, ed. *Exploring Ethnic Diversity in Burma*. Copenhagen: Nordic Institute of Asian Studies, 2007, xx + 283p., maps, tables, photos.

A well-informed academic volume such as this on ethnicity in Burma has been much needed, and any audience will find the chapters richly informative and many of them stimulating. Most of the papers probe the process through which ethnonyms and ethnic categories have been formulated, especially since colonial times, though for some groups from the period immediately preceding British entry and for others more recently. Originating in a conference held in Sweden in 2002, the book overall provides well-contextualized information on the historical formation of ethnic categories and classifications. The volume leads us to question some taken-for-granted and essentialized ethnic categories, and readers will be prompted to consider alternative possibilities for negotiating the diversity that characterizes Burma.

There will be two, no doubt overlapping, types of audience for this book: the academic audience interested in politics and ethnicity, es-

pecially in Burma, and the audience concerned mainly with the current political situation in Burma. The editor certainly has both types of reader in mind, a policy I think is admirable for a volume on such a topic. However, it is possible that the use of terms specific to academic theorizing on ethnicity may put off some in the latter audience, while a few among the former might find some of the politically situated assertions too forward and partial. An exercise of probing into ethnic category formation in Burma can never be apolitical, and there is inevitable variety in the tone adopted by each author regarding the regime.

As editor, Gravers sets the academic tone in the introduction (chapter 1). On the one hand, he asserts the importance of contextualizing and historicizing ethnic categories and ethnonyms, including how they have become instruments of identity politics, and of recognizing how primordialism, which supports the apparent givenness of ethnic categories, is itself historically constructed. On the other hand, Gravers recognizes that ethnic categories are an essential part of the way people imagine their place in the world and the way they reflect upon their position, as in a “modernist cosmology.” In other words, ethnicity is a tool of the ruling hegemonic power, but at the same time a tool for those who must position themselves within the system founded by that power. The volume, as set out in this introduction, is an attempt to look at these two aspects in interaction. Most papers accomplish this through examining the interplay of various actors and relationships, including on-the-ground practices of those who bear the ethnonyms themselves.

Unfortunately, there is one important gap. While there are papers dealing with the Chin, Kachin, Karen, Kayah/Karenni, Mon, and Shan as large categories, and while nationalism in Burma constitutes the implicit background of